

グリム童話の発話をめぐる書き換えについて

柳 泉

1. はじめに

『グリム童話集』(Kinder- und Hausmärchen 1812/15) に収録されているメルヒェン 201 話のうち、主人公、継母、継母の娘が登場するメルヒェンは、『兄と妹』(KHM11 Brüderchen und Schwesterchen), 『森の中の3人の小人』(KHM13 Die drei Männlein im Walde), 『灰かぶり』(KHM21 Aschenputtel), 『ホレおばさん』(KHM24 Frau Holle), 『白い花嫁と黒い花嫁』(KHM135 Die weiße und die schwarze Braut) の5話である。¹⁾ 『灰かぶり』と『ホレおばさん』では主人公に家事をさせる継母が、『兄と妹』、『森の中の3人の小人』、『白い花嫁と黒い花嫁』では王妃になった主人公を殺して実の娘を王妃にする継母が登場する。

『灰かぶり』に関しては、拙論『「灰かぶり」における登場人物の発話をめぐって』²⁾ において、初版、第2版、第7版を比較し、第7版における主人公の直接話法での発話回数が初版の約半分となり、継母の直接話法での発話回数が最も多くなったこと、灰かぶりの義理の姉に直接話法での発話が増えたことを確認し、直接話法が主人公から主人公の敵対者に移される傾向性があるのではないかと考察した。

本論文では、『灰かぶり』とは違うタイプの継母が登場する『兄と妹』、『森の中の3人の小人』、『白い花嫁と黒い花嫁』の3話を対象として、それぞれの初版と第7版の発話を比較し、加筆された発話の文体的効果について考察する。その上で、『灰かぶり』で見られたような、直接話法が主人公から主人公の敵対者に移される傾向性についても検証したい。³⁾

2.3 話のメルヒェンの書き換えについて

2-1. 『兄と妹』

(第7版のあらすじ)

継母から蹴られたり、パンを少ししか与えられない兄妹が2人で家を出

る。兄は、魔法使いである継母の呪いがかかった泉の水を飲み、鹿に変わる。鹿になった兄は妹と森の奥で暮らす。森で狩りをしていた王様が2人の家にやって来る。妹は王様と結婚し、鹿になった兄と一緒にお城で暮らす。2人が幸せに暮らしていることを知った継母はお城に侍女として入り込み、自分の娘と2人で王妃（主人公）を殺す。亡くなった王妃は夜になると現れ、子供の世話をして帰って行く。王妃が子供に会いに来ることができる最後の日に、王様が王妃に話しかけると王妃が生き返る。王様は継母とその娘の悪事を知り、2人は裁判にかけられて罰せられる。

表1 「兄と妹」(初版)における発話回数

発話導入動詞 直接/間接語法	sagen	sprechen	antworten	なし	直接語法 合計	meinen	合計
	直接	直接	直接	直接		間接	
兄	3	0	0	0	3	0	3
妹	0	2	1	1	4	1	5
継母	1	0	0	0	1	0	1
泉	1	0	0	0	1	0	1
	5	2	1	1	9	1	10

表2 「兄と妹」(第7版)における発話回数

発話導入動詞 直接/間接語法	sagen	sprechen	antworten	rufen	直接語法 合計	fragen	erzählen	間接語法 合計	合計
	直接	直接	直接	直接		間接	間接		
兄	0	8	1	2	11	0	0	0	11
妹(主人公)	0	10	2	2	14	0	0	0	14
継母	1	2	0	1	4	0	0	0	4
王様	0	7	0	0	7	0	0	0	7
狐師	0	0	0	0	0	0	1	1	1
泉①	0	1	0	0	1	0	0	0	1
泉②	0	1	0	0	1	0	0	0	1
泉③	0	1	0	0	1	0	0	0	1
継母の娘	0	1	0	0	1	0	0	0	1
警備兵	0	0	1	0	1	0	0	0	1
乳母	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	1	31	4	5	41	1	1	2	43

発話回数の総数を見ると、初版が10回、第7版が43回となっており、4倍以上発話回数が増えた。特に発話回数の増加が大きいのは、主人公、兄、王様である。主人公は、初版の発話回数が5回、第7版の発話回数が14回で、増えた発話回数としては9回であるが、初版の5回のうち2回分が削除

されたので新たに 11 回分の発話が増えた。兄は、初版の発話回数が 3 回、第 7 版の発話回数が 11 回のため、増えた発話回数としては 8 回であるが、初版の 3 回のうち 1 回分が削除されたので新たに 9 回分の発話が増えた。王様は、初版では発話はなく、第 7 版で 7 回に増えている。

このメルヒェンは、1811 年 3 月 10 日にマリー・ハッセンプフルーク (Marie Hassenpflug 1788-1856) から聞いたメルヒェンで、それが初版に採用された。その後、マリーから 1813 年 3 月 8 日にもう 1 つの話を受け取り、第 2 版収録の『兄と妹』のメルヒェンとなった。⁴⁾ したがって、初版と第 2 版ではストーリーの変更があることになる。書き加えられた発話を見てみると、主人公 11 回のうち 9 回、兄 9 回すべて、王様 7 回のうち 6 回、これらの発話はストーリーの変更によるものである。また、主人公、兄、王様の他に、継母が 3 回、泉が 2 回、継母の娘、乳母、警備兵が 1 回ずつ、それぞれ発話回数が増えているが、これらの増加理由もストーリーの変更によるものである。

一方、変更に関係なく書き加えられた発話 (主人公 2 回、王様 1 回) を見てみると、以下のように、主人公の特性を表現するもの、王様の感情を表現するもの、場面を劇的に演出するものとなっている。

・主人公の特性を表現 (主人公 1 回)

引用 1: Sie gingen den ganzen Tag über Wiesen, Felder und Steine, und wenn es regnete, sprach das Schwesterchen: »Gott und unsere Herzen, die weinen zusammen!« Abends kamen sie in einen großen Wald (Bd. 1. S. 90)

引用 1 和訳: 2 人は一日中、野原や畑や石を越えて歩いて行き、雨が降って来ると、妹は「神様と私たちの心が一緒に泣いているのだから!」と言った。夜になって、2 人は大きな森の中に入った。

引用 1 の初版: Sie gingen zusammen fort und kamen in einen großen Wald, (S. 81)

引用 1 の初版和訳: 2 人は一緒に歩き続けて、大きな森の中に入った。

初版では、主人公と兄は家を出て歩き続けて、大きな森の中にやって来るのだが、第 7 版では森の中に入るのは日が暮れてからで、その前に雨が降る。その場面で主人公の発話「神様と私たちの心が一緒に泣いているのだから!」が書き加えられている。後の場面でも、主人公は寝る前に「お祈

り」(Gebet)をし、また、王妃になった主人公が生き返る場面では、「神の恩恵」(Gottes Gnade, 引用3参照)という言葉が使われている。Gebetも Gottes Gnade もどちらも初版にはない。第7版では、これらの言葉と引用1の発話が追加されたことによって主人公の信心深さが表現されるようになった。

・王様の感情を表現 (王様1回)

引用2: Sprach der König: »Ach Gott, was ist das! ich will in der nächsten Nacht bei dem Kinde wachen.« (Bd. 1. S. 96)

引用2和訳: 王様は、「ああ神様、何てことだ！ 私は明日の晩、子供のそばで起きていよう。」と言った。

乳母は亡くなった王妃を何度も見かけていたが、そのことを誰にも言わずにいた。しかし、亡くなった王妃の話し声を聞き、王様に報告する。王様の「ああ神様、何てことだ！ 私は明日の晩、子供のそばで起きていよう。」という発話によって、王妃が現れたことへの驚きと、自分の目で確かめようという王様の決意が表現されている。

・場面を劇的に演出 (主人公1回)

引用3: Da antwortete sie: »ja, ich bin deine liebe Frau«, und hatte in dem Augenblick durch Gottes Gnade das Leben wieder erhalten, war frisch, rot und gesund. (Bd. 1. S. 97)

引用3和訳: すると王妃は、「はい、私はあなたの妻です」と言い、その瞬間に王妃は神の恩恵によって命を取り戻し、生き生きとし血色も良く、元気になった。

子供部屋に王妃が現れると、王様はお妃に飛びつき、「私のお妃だ」と声を上げる。引用した発話は、王様の言葉に対する王妃の返事である。初版では、王様がお妃に触れるとお妃は生氣を取り戻すのであるが、この発話を書き加えられたことで、王妃の声が伝わり、王妃が生き返ったことを劇的に描写し読者に印象づけている。

2-2. 『森の中の3人の小人』

(第7版のあらすじ)

主人公は父親と2人暮らしの娘である。父親が再婚し、継母が自分の娘を連れてやって来る。ある冬の日、継母は主人公に紙でできた服を着せ、パンを1つ持たせて、森へ行っていちごを取って来るよう命じる。主人公は森で3人の小人に出会い、パンを分け一緒に食べる。3人の小人に言われた通り、小人の家の裏口の雪を掃くといちごがあり、主人公は小人たちにお礼を言って帰る。主人公は小人たちから、美しさ、話すたびに口から出てくる金貨、王様との結婚を贈られる。森での出来事を聞いてうらやましく思った継母の娘が森へいちごを探しに行く。継母の娘も3人の小人に出会うが、パンも分けず、雪も掃かなかったので、3人の小人から、醜さ、話すたびに口から飛び出す蛙、不幸な死を贈られる。腹が立った継母は、主人公に氷の張った川で麻糸をすすぐように命じる。主人公が川で麻糸をすすいでいると、王様を通りかかり、主人公はお城へ行き王様と結婚する。主人公が王様と結婚し、子供を産み、幸せに暮らしていることを聞いた継母は、自分の娘を連れてお城へ行く。2人は王妃（主人公）を川に投げ、継母の娘が王妃のふりをする。その夜と次の日の夜に、王妃は鴨の姿で台所に現れて、料理番に王様と子供の様子を尋ねる。3日目の夜、王妃は料理番に、頭の上を刀で3度はらうよう王様に伝えてほしいと頼む。王様がその通りにすると、王妃は生き返る。継母と継母の娘の悪事を知った王様は、継母に2人がしたことの罰を尋ねる。継母はそれが自分たちのしたこととは気づかず、内側に釘を打ち込んだ樽に入れて山の上から川に転がす、

表3 「森の中の3人の小人」(初版)における発話回数

発話導入動詞	sagen	sprechen	antworten	fragen	なし	直接話法 合計	sagen	erzählen	fragen	間接話法 合計	合計
	直接	直接	直接	直接	直接		間接	間接	間接		
父	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	2
継母	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
主人公	3	0	0	1	1	5	0	0	0	0	5
3人の小人	1	1	0	0	0	2	0	0	1	1	3
小人①	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
小人②	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
小人③	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1
継母の娘	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
継母と娘	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1
台所番	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	2
	9	2	1	1	3	16	1	1	1	3	19

表4 「森の中の3人の小人」(第7版)における発話回数

発話単人動詞	sagen	sprechen	fragen	rufen	antworten	直接話法 合計	sprechen	fragen	erzählen	verkündigen	間接話法 合計	合計
直接/間接話法	直接	直接	直接	直接	直接		間接	間接	間接	間接		
父	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
継母	1	4	0	1	1	7	1	0	0	0	1	8
主人公	2	4	1	0	2	9	0	0	2	1	3	12
3人の小人	0	5	1	2	0	8	0	0	0	0	0	8
小人①	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
小人②	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
小人③	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
継母の娘	0	0	0	1	2	3	0	0	1	0	1	4
台所番	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	2
王様	1	2	1	0	0	4	0	1	0	0	1	5
	6	21	3	4	7	41	1	1	3	1	6	47

と答える。継母と継母の娘はその通りの罰を受ける。

発話回数の総数を見ると、初版が19回、第7版が47回となっており、2.5倍近く発話回数が増えた。特に発話回数の増加が大きいのは、主人公の6回、継母の5回、王様の5回、3人の小人の5回である。

初版はドロテア・ヴィルト (Henriette Dorothea Wild 1793-1867) から聞いたヘッセン地方のメルヒェンで、第2版にはツヴェールン (Zwehm) のドロテア・フィーマン (Dorothea Viehmann) の話とアマーリエ・ハッセンブルーク (Amalie Hassenpflug 1800-1871) の話も加わり3人の話が合成されたものになった。⁵⁾

ストーリーの変更による発話の書き換えは、主人公6回のうち4回、継母5回すべて、王様5回すべて、3人の小人5回すべてである。継母の娘の発話も3回増えたが、こちらもストーリーの変更によるものである。

主人公の残り2回分の発話は、主人公の特性を表現するものであり、3人の小人の個別の発話3回分については、発話形式の統一によるものであると考えられる。

・主人公の特性を表現 (主人公2回)

引用4: Wie es eintrat und »guten Abend« sagte, (Bd. 1. S. 105)

引用4和訳: 娘は家に入って、「こんばんは」と言うのと、

森から帰宅した主人公が家族に「こんばんは」と挨拶すると、口から金貨がこぼれる。主人公が3人の小人から贈り物をもらったのは、パンを分

け、雪を掃いたことの他に、行儀が良い (artig) からでもある。3人の小人に出会う場面で、主人公は初版でも第7版でも3人の小人に挨拶をしているが、帰宅時の挨拶は初版にはない。この発話を書き加えられたことで、主人公の行儀の良さが強調された。

引用 5: die sprach: »König, was machst du? schläfst du, oder wachst du?« (Bd. 1. S. 107)

引用 5 和訳: 鴨は「王様、何をしているの? 眠っているの、それとも起きているの?」と言った。

主人公は、継母とその娘に川に投げられた後、鴨の姿でお城の台所に現れる。鴨は台所番にお城の人々の様子を尋ねるのだが、初版では、継母とその娘、そして子供の様子についての質問であった。第7版では王様の様子についての質問が追加され、これが最初の質問となっている。主人公が生き返るためには王様の助けが必要であり、王様のことを尋ねるこの発話は、自分が生き返るための積極的な行動とも言えるのである。

・発話形式の統一 (小人 3 回)

引用 6 (小人①): Der erste sprach: »ich schenk' ihm, daß es jeden Tag häßlicher wird.« (Bd. 1. S. 106)

引用 6 和訳: 1人目の小人は「僕があの子に贈るのは、あの子が日に日に醜くなることだ。」と言った。

引用 7 (小人②): Der zweite sprach: »ich schenk' ihm, daß ihm bei jedem Wort, das es spricht, eine Kröte aus dem Munde springt.« (Bd. 1. S. 106)

引用 7 和訳: 2人目の小人は「僕があの子に贈るのは、あの子が言葉を話すたびに口から蛙が飛び出すことだ。」と言った。

引用 8 (小人③): Der dritte sprach: »ich schenk' ihm, daß es eines unglücklichen Todes stirbt.« (Bd. 1. S. 106)

引用 8 和訳: 3人目の小人は「僕があの子に贈るのは、あの子が不幸な死に方をすることだ。」と言った。

継母の娘への贈り物に関する3人の小人それぞれの発話は初版にはない。主人公への贈り物に関しては初版から直接話法で表現されており、継母の娘に対する贈り物についても主人公と同じように直接話法での表現としたのではないか。主人公への贈り物と継母の娘への贈り物について、3

人の小人の発話形式をそろえたことで、主人公への素晴らしい贈り物と継母の娘へのひどい贈り物の対比がより鮮明になった。

2-3. 「白い花嫁と黒い花嫁」

(第7版のあらすじ)

主人公は、継母とその娘と3人暮らしである。ある日、継母とその娘と3人で草を刈りに行く途中で、貧しい格好をした男の人に道を尋ねられる。継母とその娘は教えなかったが、主人公は親切に教える。その男の人は神様で、主人公は望みを3つ叶えてもらう。主人公にはお城で王様に仕えている兄がおり、その兄が主人公の絵を描き、お城の自分の部屋に飾る。お妃を亡くした王様がその絵を見て、主人公と結婚することを決め、兄に主人公を迎えに行かせる。主人公の幸せを妬ましく思った継母の娘は母親の力を借り、お城に行く途中でうまく主人公と入れ替わる。継母の娘は醜いのだが、兄も王様も継母の魔術によってだまされていたため、王様は継母の娘と結婚する。ある夜、鴨の姿で台所に現れた主人公は、台所番に話しかける。それが3日間続き、台所番が王様に報告する。4日目の晩、台所にやって来た鴨の首を王様が切り落とすと、絵の女性が現れる。王様は継母とその娘の悪事を知り、2人が行ったことに対する罰を継母に尋ねる。継母は、裸にして内側に釘を打ち込んだ樽に入れて馬に追わせる、と答える。継母とその娘はその通りの罰を受け、王様と主人公の結婚式が挙げら

表5 「白い花嫁と黒い花嫁」(初版)における発話回数

発話導入動詞	sagen	sprechen	fragen	antworten	rufen	hinsetzen	なし	直接話法	sagen	fragen	erzählen	間接話法	合計
直接/間接話法	直接	直接	直接	直接	直接	直接	直接	合計	間接	間接	間接	合計	合計
神様	1	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
主人公	3	2	5	0	0	0	1	11	0	0	1	1	12
継母	1	5	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	6
継母の娘	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	2
兄	0	0	0	0	3	0	0	3	1	0	0	1	4
台所番	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	2
王様	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	2
	5	9	7	2	3	1	1	28	1	1	1	3	31

表6 「白い花嫁と黒い花嫁」(第7版)における発話回数

発話導入動詞 直接/間接話法	sagen	sprechen	fragen	antworten	rufen	hinzusetzen	なし	直接話法 合計	sagen	fragen	erzählen	間接話法 合計	合計
	直接	直接	直接	直接	直接	直接	直接		間接	間接	間接		
神様	1	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
主人公	3	2	5	1	0	0	1	12	0	0	1	1	13
継母	1	5	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	6
継母の娘	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	2
兄	0	1	0	0	3	0	0	4	1	0	0	1	5
台所番	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	2
王様	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	1	2	3
	5	10	7	3	3	1	1	30	1	1	2	4	34

れ、兄は高い身分となる。

発話回数の総数を見ると、初版が31回、第7版が33回となっており、主人公と兄の発話がそれぞれ1回ずつ増えた。

このメルヒェンは、メクレンブルク地方とパーダーボルン地方のメルヒェンで、メクレンブルクの寄稿者は不明であるが、パーダーボルンに関してはハクストハウゼン家 (Familie von Haxthausen) からのものであるとされている。⁶⁾ 初版以降、別の話との合成などはされておらず、ストーリーの変更はない。

増加した2回の発話は主人公と兄の会話であり、主人公と王様の結婚につながる伏線となっている。

・伏線としての効果 (2回: 兄1回, 主人公1回)

引用9 (兄) : Nun sprach Reginer einmal zu ihr: »liebe Schwester, ich will dich abmalen, damit ich dich beständig vor Augen sehe; denn meine Liebe zu dir ist so groß, daß ich dich immer anblicken möchte.« (Bd. 3. S. 26)

引用9和訳: さて、ある時レギーネルは、「ねえ、僕は君をいつでも目にすることができるように、君を絵に描こうと思う。僕の君への愛は、君をいつも見ていたいくらい大きいんだよ。」と言った。

引用10 (主人公) : Da antwortete sie: »aber ich bitte dich, laß niemand das Bild sehen.« (Bd. 3. S. 26)

引用10和訳: すると妹は、「でもお願いだから、その絵を誰にも見せないでね。」と答えた。

初版にも主人公の絵をめぐる話は描かれているが、会話体ではない。また、妹の「お願いだから、誰にも絵を見せないように」という発言内容は初版にはない。絵の扱いに関する妹の発言が直接話法で伝えられることで、絵が誰かに見られたら何かが起こるということを読者に予感させるとともに、王様との結婚の伏線となっている。

3. おわりに

3話のメルヒェンにおいて、ストーリーの変更に関わりなく加筆された発話は、主人公が5回、兄が1回、王様が1回、3人の小人の個々の発話3回、計8回である。主人公の発話5回のうち3回については、信心深さ（『兄と妹』）と、行儀の良さ及び行動力（『森の中の3人の小人』2回）を表現している。残り2回の発話のうち1つは主人公が生き返る様子を演出（『兄と妹』）するものであり、もう1つは兄との会話で主人公が王様と結婚することへの伏線（『白い花嫁と黒い花嫁』）となっている。王様の発話には、亡くなった王妃が現れたことに対する驚きとそのことを確かめようという決意が表現されている。3人の小人の個々の発話は発話形式の統一によるものではあるが、主人公への素晴らしい贈り物と継母の娘へのひどい贈り物の対比がより鮮明になり、極端な対照（extreme Kontraste）を好むメルヒェンの文体⁷⁾となった。ストーリーの変更とは関係なく加筆されたこれらの発話は、主人公自身の発話であれ、主人公以外の登場人物の発話であれ、主人公を描写している。

主人公の敵対者である継母と継母の娘の直接話法での発話回数を初版と第7版で比較すると、『白い花嫁と黒い花嫁』では継母（初版、第7版6回）も継母の娘（初版、第7版2回）も同数であるが、『兄と妹』では継母は3回増加（初版1回、第7版4回）、継母の娘は1回増加（初版なし、第7版1回）、『森の中の3人の小人』では継母は5回増加（初版2回、第7版7回）、継母の娘は3回増加（初版なし、第7版3回）している。一方、主人公の直接話法での発話回数を初版と第7版で比較すると、『兄と妹』では初版4回から第7版14回で10回、『白い花嫁と黒い花嫁』でも初版11回から第7版12回で1回増えており、この2話では主人公の直接話法での発話回数が最も増えた。『森の中の3人の小人』では主人公の直接話法は初版5回から第7版9回で4回の増加であり、主人公よりも継母

の方が直接話法の増加数が多い。しかし、このメルヒェンにおいて直接話法での発話回数が最も増加したのは3人の小人で、初版の2回から第7版の8回と6回増えている。3人の小人は主人公の味方であり、今回調査した3話のメルヒェンでは、『灰かぶり』のような、直接話法が主人公から主人公の敵対者に移される傾向性は見られない。

これら3話のメルヒェンは、いずれも初版と比較して第7版で発話回数の総数が増えている。『兄と妹』と『森の中の3人の小人』では、どちらも初版では王様の発話がなかったが、第7版ではそれぞれ7回と5回の発話回数となっている。『森の中の3人の小人』においては発話回数が最も増えた登場人物が3人の小人である。これら3話のメルヒェンは、『灰かぶり』のように主人公を働かせる継母が登場するメルヒェンではなく、王妃になった主人公を殺して実の娘を王妃にする継母のメルヒェンである。このようなメルヒェンにおいて、王様と3人の小人の発話回数の増加したことから、主人公の味方の発話回数が増える傾向性があると言える。

本論文では、対象とした3話のメルヒェンにおいて主人公の味方の発話回数が増える傾向性があると結論づけたが、そのように書き換えたヴァイルヘルムの意図についての考察までは至らなかった。また、『白い花嫁と黒い花嫁』において一般的な発話導入動詞とされていない *hinzusetzen* が継母の娘の発話に使用されていたことについて、第7版では発話導入動詞として *sagen* ではなく *sprechen* が最も多く使用されていることについて、発話導入動詞に関するこの2点についての考察も残ったままである。これらについては今後の課題としたい。

注

- 1) KHMはKinder- und Hausmärchenの略で、番号は第7版における収録順である。
- 2) 柳, 135-147頁。
- 3) 登場人物の発話は、直接話法にせよ間接話法にせよ発話導入動詞 (Redeeinleitende Verben) によって導かれる。Helbig/Buscha (1970) は、発話導入動詞を、言う型動詞 (ein übergeordneter Verb des Sagens) と思考・感情型動詞 (Verben des Denkens und Fühlens) の2種類に分類している。(Vgl. Helbig/Buscha, S. 197.) 本論文では、心理描写ではなく発言を取り上げるため、言う型動詞に着目する。発話導入動詞がなく引用符のある発話も直接

話法の発話として数える。また、発話内容が副文 (Nebensatz) である場合も間接話法の発話として数える。(Vgl. Helbig/Buscha, S. 198.)

『グリム童話集』のテキストについては、初版 (第1巻 1812年, 第2巻 1815年) から第7版 (1857年) までの7つの版がある。第2版 (1819年) からはヴィルヘルム (Wilhelm Grimm 1786-1859) が『グリム童話集』を担当し、初版から第2版にかけて多くのメルヒェンが書き換えられている。(Vgl. Rölleke, S. 525.) この書き換えには、初版の話に別の類話を合成するなど、ストーリーの変更が関わっている。今回の比較調査は、細かいストーリーの変更が発話の書き換えにどう影響を及ぼしているかではなく、加筆された発話の文体的効果を考察することが目的であるため、第2版は入れずに初版と第7版を比較する。使用するテキストは次の通りである。

初版: Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Erstdruckfassung 1812-1815. Eschborn bei Frankfurt am Main 1999.

第7版: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1, 3. Frankfurt am Main 1984.

引用の際は、該当ページを引用文末の括弧内に付記し、拙訳を添える。

- 4) Vgl. Uther, S. 22.
- 5) Vgl. Ebd., S. 29.
- 6) Vgl. Ebd., S. 286.
- 7) Vgl. Lüthi (1960), S. 34.

参考文献

Helbig, Gerhard, Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik. 17. Aufl., Leipzig 1996. (G. ヘルビヒ /J. ブッシャ 在間進訳: 現代ドイツ文法 三修社 1991.)

Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. 2. Auflage. Bern 1960.

Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. Ästhetik und Anthropolgie. Düsseldorf/Köln 1975.

Rölleke, Heinz: Zur Biographie der Grimmschen Märchen. In: Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819, textkritisch revidiert und mit einer Biographie der Grimmschen Märchen versehen. Hrsg. von Heinz Rölleke. 1. Auflage. Köln 1982.

Uther, Hans-Jörg: Handbuch zu den »Kinder- und Hausmärchen« der Brüder Grimm,

Berlin 2008.

ルース・ボティックハイマー 鈴木晶, 田中京子, 広川郁子, 横山緝子共訳:
グリム童話の悪い少女と勇敢な少年 紀伊國屋書店 1990.

柳 泉:「灰かぶり」における登場人物の発話をめぐって『リェンコイス』第48
号 2015. 135～147頁